

# 『対話』の四草稿の収集について

土橋友梨子

## はじめに

18世紀フランスを代表する思想家ジャン＝ジャック・ルソー (Jean-Jacques Rousseau, 1712-1778) は、1778年7月2日、首都パリからおよそ50キロ離れたエルクモンヴィルにてその生涯を静かに閉じた。ルソーの死後、この終の棲家を彼に提供していたルネ＝ルイ・ド・ジラルダン侯爵 (René-Louis de Girardin, 1735-1808)、スイス人の旧友ポール＝クロード・ムルトゥー (Paul-Claude Moultoü, 1731-1797)、ピエール＝アレクサンドル・デュ・ペーラー (Pierre-Alexandre DuPeyrou, 1729-1794) は、『ジャン＝ジャック・ルソー全集』出版の準備に取りかかった<sup>1)</sup>。彼らはまず、自分たちが所有しているものも含め、各地で保管されていたルソー作品の草稿を集めることから始めたのだった。

ところが、『ルソー全集』出版の立案張本人であったにもかかわらず、ジラルダン侯爵とムルトゥーは、自分たちがそれぞれ所有していた2つの作品の草稿の存在については互いに秘密にし合っていた。ジラルダン侯爵は『告白』 (*Les Confessions*, 1782-1789 出版) の草稿の存在を隠し<sup>2)</sup>、ム

---

1) *Œuvres posthumes de Jean-Jacques Rousseau*, t. V (in-8°)、及び、*Collection complète des Œuvres de J. J. Rousseau*, t. XI (in-4°), t. XXI et XXII (in-8° et in-12°).

『対話』の四草稿の収集について（土橋）

ルトゥーは『告白』だけでなく『ルソー、ジャン＝ジャックを裁く—対話』（*Rousseau juge de Jean-Jacques*, 1780年、1782年出版。以下、『対話』と略記）の草稿の存在を頑なに隠し続けたのだ。ルソーの死後に交わされた彼らの書簡は、『告白』と『対話』を『ルソー全集』に組み込んで出版したいジラルダン侯爵と、それには断固反対の姿勢を貫いたルトゥーによる、腹の探り合いと嘘によって展開されている<sup>3)</sup>。最終的には、ジラルダンに圧をかけられ続けたルトゥーが、『対話』と『告白』の両方の草稿を所持していることを白状せざるを得なくなり、1782年に『対話』は『ルソー全集』のなかで『告白』「第一部」に続く、「回想録の第二部」として発表されることになった。

亡きルソーの名誉を称え、寡婦となった妻テレーズの財源確保のために『ルソー全集』を出版することが彼らの共通の目的であったにもかかわらず、作品の選出をめぐるこれほどまでに意見が対立したのは一体なぜだろうか。本稿では、『ルソー全集』出版に取り組んだ編者3人による数多くの書簡や、ルソーから『対話』の草稿を託された他の人ターコンディヤック、ブースビー、ダンジヴィレ伯爵—に關係する文書を丁寧に読み解きながら、『対話』を公にすることに対する各人それぞれの思惑や立場を明確にすることを目的とする。この過程を経ることは、これまで焦点を当てられてこなかった『対話』という作品の、初版出版に至るまでの複雑な経緯の全貌を明らかにするための一助となると考える<sup>4)</sup>。

---

2) ジラルダン侯爵が所持していた『告白』の草稿は「バリ草稿」と呼ばれ、現在はバリの国民議会図書館に所蔵されている。

3) 現存する書簡はジラルダン侯爵から送付されたものがほとんどである。それらは、エルムノンヴィル近くにある、Musée Jacquemart-André, Chaalis (Fonds Girardin) で所蔵されている。

4) 『対話』の出版に焦点を当てた研究はこれまでなかった。『ルソー全集』出版に関しては、例えば以下を参照のこと。Raymond Birn, *Forging Rousseau, Print, commerce and cultural manipulation in the late Enlightenment*, SVEC, 08, 2001. En outre, voyez Philip Stewart, *Éditer Rousseau, Enjeux d'un corpus (1750–2012)*, ENS édition, Métamorphoses du livre, Lyon, 2012.

## 1. 『対話』に対する『ルソー全集』編集者たちのそれぞれの立場

『対話』という作品には「ジュネーヴ草稿」のほかに3つの清書原稿が残されている。現在それらは、「BnF草稿」（あるいは「コンディヤック草稿」）、「ロンドン草稿」、「パリ草稿」と呼ばれ、フランス、イギリス、スイスの図書館で所蔵されている。清書原稿のほかに、『対話』と『孤独な散歩者の夢想』（*Les Réveries du promeneur solitaire*, 1782）の断片的な下書きが書かれている小さなノートがあるのみだ<sup>5)</sup>。この下書きはヌーシャテルの図書館で所蔵されているため、「ヌーシャテル草稿」と呼ばれている。

1782年に出版された『対話』には、ムルトゥーが所持していたジュネーヴ草稿が底本として使用されている。編集の際に、編者らはルソーが付けたいくつかの注を削除し、人名をアステリスクで伏せた。『対話』の初版には、出版のためにこうした処置がなされたのだった。その後、1959年にプレイヤード版全集の編者であるロベール・オスモンが再びジュネーヴ草稿を検討し直して出版するまで、読者はいわば不完全な『対話』しか目にする機会がなかった。オスモンは、1782年版の『全集』の編者らと同様、ジュネーヴ草稿を底本とした<sup>6)</sup>。なぜならジュネーヴ草稿は4つの清書原稿のなかで一番最後に清書された草稿と考えられたからである。

ここではまず、『ルソー全集』編纂にかかわったムルトゥー、デュ・ペールー、ジラルダン侯爵の『対話』の草稿に対する考えを詳述したい。

---

5) 「ヌーシャテル草稿」には、『対話』のあとがきである「さきの著作のてんまつ」の下書きが数ページにわたり殴り書きされている。

6) 1780年に「第一対話」しか含んでいない「ロンドン草稿」を底本としてイギリスで出版された版と、2016年に「BnF草稿」を底本として出版された、クラシック・ガルニエ版を除く。*Rousseau juge de Jean-Jacques, Dialogues*, éd. par Boothby, Lichfield, 1780. / J.-J. Rousseau, *Rousseau juge de Jean Jaques* (manuscrit « Condillac »), avec les variantes ultérieures, édition critique par Jean-François Perrin, *Œuvres complètes*, tome XVIII, Paris, Classiques Garnier, coll. “Bibliothèque du XVIII<sup>e</sup> siècle”, 2016.

『対話』の四草稿の収集について（土橋）

### 1-1. ポール＝クロード・ムルトゥー

ルソーからムルトゥーへ『対話』のジュネーヴ草稿が託されたのは、ルソーがエルムノンヴィルに隠遁するわずか10日前の、1778年5月12日のことであった。ムルトゥーは、旧友ネッケル夫人（Suzanne Necker, 1737-1794）に会うために、息子ピエール・ムルトゥー（Pierre Moultoy）とともにジュネーヴからはるばるパリにやってきた折に、プラトリエール通りに住むルソーのもとを訪れたのである。ルソーとムルトゥーは1754年にジュネーヴで知り合い、ときにはルソーが感情的になって一方的に絶交を宣言することがあっても、長い間手紙の交換を続けてきた親しい間柄であった。とはいえ、この時のパリでの再会は、実に24年ぶりのことであった。草稿の委託の様子について、ムルトゥーの孫であるジョルジュ・ストレックアイゼン＝ムルトゥー（Georges Streckeisen-Moultoy）の証言が残されている。

「若者よ [=ピエール・ムルトゥー（ムルトゥーの息子）]、私 [=ルソー] はたった今、私が持っている中で最も貴重な物 [=草稿] をあなたのお父さんの友情に託したところです。彼は私の死後すぐにこれらの草稿を印刷させることを約束してくれました。」<sup>7)</sup>

かつてムルトゥーの息子が立ち会った遠い過去の場面を、さらにその場にいなかった彼の甥が叙述しているため、ドラマチックな脚色がほどこざれている可能性は否定できない。だが、ルソーが友情の名のもとに『対話』と『告白』の草稿を直接託し<sup>8)</sup>、さらには『ルソー全集』の編者になってほしいと頼んだ人物は、他にもないジュネーヴの友人ムルトゥーだったの

7) Francis De Crue, *L'ami de Rousseau et des Necker, Paul Moultoy à Paris en 1778*, Paris, Ancienne Librairie, Honoré Champion, 1926, p. 40.

8) 『対話』と『告白』のほかにも、『啓示についてのアレゴリー』の断章、『化学』の草稿がムルトゥーに託された (*Ibid.*, p. 95.)。

である<sup>9)</sup>。

では、『ルソー全集』を出版するにあたって、なぜムルトゥーは『対話』をそこに入れ、出版することを頑なに拒否したのであるだろうか。その答えは『対話』のあとがきである「さきの著作のてんまつ」（« l'Histoire du précédent écrit »）から読み取ることができる。

[...] 私はそれを [= 『対話』の草稿] 彼よりももっと若い人に渡して頂きたいとだけお願いした。その人なら私や迫害者たちよりも十分承らえて、いつかはこの著作を公表することができ、そして誰も傷付ける恐れがないだろう<sup>10)</sup>。

ルソーから『対話』を託され、それを読むことができたムルトゥーは、ルソー自身が書き残した希望を彼の望み通りに叶えようとしたのであった。一方で、『対話』と『告白』の出版を要求するジラルダン侯爵との交渉においては、ムルトゥーは『対話』を所持していることを彼に知らせていなかったため、「さきの著作のてんまつ」について触れることはできなかった。そのため、彼はルソー自身から全て打ち明けられているとして、ジラルダン侯爵に次のようにルソーの希望を伝えている。

彼 [=ルソー] は私に『対話』と彼の回想録である『告白』の第二部について話したものです。[...] 彼は私に次のように言いました。「私は誰も危険に晒したくありません。なぜなら、私は自分の敵たちには似ていないからです。回想録の第一部は私のことしか悪く言

---

9) CC. 7390 (Moultoù à Girardin, le 9 décembre 1778, t. XLII, p. 207.) ルソーの書簡からの引用は以下の版を用い、これ以降は先述のように略記する。Correspondance complète de Jean-Jacques Rousseau, établie et annotée par R. A. Leigh, Genève, Institut et musée Voltaire, 1965-1991.

10) Dialogues, « l'Histoire du précédent écrit », in OC, I, p. 982. ルソー作品からの引用は、特記しない限り以下の版を用い、これ以降は先述のように略記する。Jean-Jacques Rousseau, Œuvres complètes, édition publiée sous la direction de Bernard Gagnebin et Marcel Raymond, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », t. I-V, 1959-1995.

『対話』の四草稿の収集について（土橋）

っていません。ですが、それを読み終えたあともあなたは私を好きでいてくれるでしょう。」[…]

彼から聞いているので、私は次のことを知っています。[…] ルソーよりもっと若い人にそれら [= 『対話』] を託し、その人が次の世紀になってからしか『対話』を出版させないことを望んでいることを<sup>11)</sup>。

出版時期の問題のほかに、ルソーにとって『対話』と『告白』第二部の内容は、他人の名誉や生活を脅かす危険性をはらんでいるという理由を挙げ、ムルトゥーはこれらの2つの作品を『ルソー全集』に含めて出版することを、どうしてもジラルダン侯爵に諦めさせようと努めた。ルソーの意志を守るというムルトゥーのこの態度は、ロンドン草稿を底本とした版がイギリスで出版されることが決定し、『対話』を出版せざるを得なくなるまで一貫して変わることはなかった。

## 1-2. アレクサンドル・デュ・ペールー

『エミール』(*Émile ou de l'éducation*, 1762) と『社会契約論』(*Du contrat social*, 1762) の出版・断罪後、ルソーはフランスを追われ各地を転々とするようになった。ルソーとデュ・ペールーがヌーシャテルで出会ったのは、この苦難の時期のことであった。論争作品『山からの手紙』(*Lettres écrites de la montagne*, 1764) 出版後、今後は作品を出版せずに余生を静かに送りたいと考えていたルソーは、この時期にも財源確保のため、一度『ルソー全集』を計画したことがあった<sup>12)</sup>。そして、このときに企画した

---

11) CC. 7390, *op. cit.* 「次の世紀になってからしか (…)」の部分は、ヌーシャテル草稿には記されていない。つまり、ジュネーヴ草稿の「さきの著作のてんまつ」のなかの以下の部分は後から加筆された。「Il s'attacha singulièrement à cette dernière idée, et il m'a paru par la suscription qu'il a faite pour l'enveloppe du paquet et qu'il m'a communiquée, qu'il portoit tous ses soins à faire en sorte, comme je l'en ai prié que le manuscrit ne fut point imprimé ni connu avant la fin du siècle présent. Quant à l'autre partie de mon intention, qui étoit qu'après ce terme l'écrit fut fidèlement imprimé et publié, j'ignore ce qu'il a fait pour la remplir » (OC, I, p. 982.)

『ルソー全集』の責任者にデュ・ペールーを指名したのであった。ところが、『山からの手紙』出版をめぐる巻き起こった論争が、ルソーを再び放浪生活へと追いやることになってしまった。ヌーシャテルを去る前、ルソーは自分の原稿や膨大な数にのぼる手紙を整理し、デュ・ペールーに預けた<sup>13)</sup>。そのなかには書きかけの『告白』の草稿も含まれており、デュ・ペールーはルソーからいざというときにはその原稿を燃やすよう依頼されていた<sup>14)</sup>。こうした過去の経緯もあり、デュ・ペールーもジラルダン侯爵やムルトゥーとともに、死後出版の『ルソー全集』の出版に協力をするようになったのであった。

反目し合うジラルダン侯爵とムルトゥーの間であって、デュ・ペールーの立場はむずかしいものであったが、亡き友人への誠実な友情と未亡人テレーズの生活の糧のために尽くす姿勢を最後まで貫いた。このことは、ルソーの逝去を知ったあとすぐにテレーズに宛てて書かれた手紙と『ルソー全集』企画の初期にムルトゥーに宛た手紙によっても明白である。

ブルゴワンを離れたときに、彼自身 [=ルソー] で取り除いたいくつかの原稿を除いて、彼のすべての原稿は、彼が残したそのままの状態で私の家にあります。これらの原稿はあなたの好きなようになさってください<sup>15)</sup>。

私は自分の家にある委託物 [=草稿] と別の機会にルソーが取り除いた幾枚かの紙に対して、いかなる権利も持っておりません。この委託物について、私は彼の妻が命じる通りにしか使うことができま

---

12) CC. 3682 (Rousseau à DuPeyrou, à Motiers le 29<sup>bre</sup> 1764, t. XXII, p. 130).

13) Claire Rosselet, « Histoire du fonds des manuscrits Rousseau, conservé à la Bibliothèque de la ville de Neuchâtel », *Revue neuchâteloise*, 19, 1962, p. 11-21.

14) この草稿は『告白』の第4巻までの未完の草稿で、「ヌーシャテル草稿」と呼ばれている。現在はヌーシャテル図書館で所蔵されている。

15) CC. 7193 (Du Peyrou à Marie-Thérèse Levasseur, 14 Juillet 1778, t. XLI, p. 24.)

せん。ですが、あなたのアイディアは彼女にとってもいくらか好ましいものであるように思えます。また、彼女がそれを感謝を持って受け入れないということはありませんように思えます<sup>16)</sup>。

デュ・ペールーに対しては、ルソーは『対話』の存在を知らせていなかったため、ムルトゥーがこの作品の存在を打ち明けるまで、彼はルソーが希望した『対話』の出版時期を知る由もなかった。しかし、ルソーの草稿に対する権利は自分のものではないと誠実に断言するデュ・ペールーは、ジラルダン侯爵の意見よりも、ルソーの意志を尊重しようとするムルトゥーの意見に賛同したように思える。

3人で計画を進めてきたにもかかわらず、最終的に『ルソー全集』を完成させ、出版したのはデュ・ペールーただ一人であった。残りの二人は自分たちの希望通りに事を進めることができなかったためにこの企画から離脱したのだ。また、『対話』の出版ほかに、ルソーが心配していた『告白』の第二部は、スイスの女流作家イザベル・ド・シャリエール (Isabelle de Charrière, 1749-1805) の協力を得て1790年に出版された<sup>17)</sup>。

デュ・ペールーは、1794年11月13日にヌーシャテルで息を引き取った。子どもがいなかったデュ・ペールーは、彼が所有していたルソーの手紙や草稿をヌーシャテル図書館（現ヌーシャテル公立・大学図書館）に寄贈した。ここには膨大な数の原稿が所蔵されているが、『対話』の草稿について言えば、上述の「さきの著作のてんまつ」と名付けられたあとがきの下書きが殴り書きされている小さなノート、「ヌーシャテル草稿」が所蔵されている<sup>18)</sup>。

---

16) CC. 7243 (Du Peyrou à Moulto, Neufchatel, 5 aoust 1778, t. XLI, p. 135.)

17) Isabelle de Charrière, « Eclaircissements relatifs à la publication des *Confessions* de Rousseau », dans *Belle de Zuylen, Œuvres complètes*, t. X, Slatkine, 1981.

18) Cote du document : MsR. 79.



### 1-3. ジラルダン侯爵

ルソーと彼の草稿に対して真摯であり続けようとしたムルトゥーとデュ・ペールーは、ルソーの意志を尊重せずに、真意の見えない、自分の意見ばかりを主張するジラルダン侯爵に対して非常に強い不信感を抱いていた。『ルソー全集』出版をめぐる編者たちの書簡の読解を通して分かるのは、ルソーの草稿の扱いをめぐる、ジラルダン侯爵の態度がもっとも一貫性がなく、もっとも自己中心的であることだ。とりわけ、『告白』第二部と『対話』を世に出す時期について一貫した考えを持ち、慎重でありたいムルトゥーとは対立し、両者は互いに事実を隠し、嘘をつきあっていた。数年間に渡る腹の探り合いはあまりに複雑であるため、次の機会に譲り、ここではいくつかの事柄を提示するにとどめたい。

まず、ジラルダン侯爵の胡散臭さは彼とルソーとの関係にもあらわれている。彼らの出会いは1774年7月であると考えられている<sup>19)</sup>。ルソーは1770年にパリに戻って以来、写譜で生計を立てていた。ルソー作品の熱烈な読者であったジラルダン侯爵は、客のうちの一人で、しばしばルソーの家に通っていたらしい。当時、ルソーを支えようと援助を申し出る者たちがいた。例えば、ロンドン草稿を託されたブルック・ブースビーは、ルソーがイギリスからの年金を受給できるよう奔走した<sup>20)</sup>。また、フラマンヴィル騎士 (le chevalier de Flamanville) はノルマンディーに住処を提供しようと申し出ていて、話がまとまりかけていたらしい<sup>21)</sup>。ところが、どのような経緯なのかは不明であるが、ジラルダン侯爵はルソーに援助を申し出ていた他の人々をあっという間に出し抜き、ルソーをパリから連れ出してエルムノンヴィルの自分の屋敷に連れてくることに成功したのであ

---

19) *Dictionnaire de JJR*, p. 376.

20) 例えばブースビーによる、以下の2通の手紙を参照のこと。CC. 7131 (Boothby à Harcourt, vicomte Nuneham, le 10 août 1777, XL, p. 141.); CC. 7145 (Boothby à Harcourt, vicomte Nuneham, le 14 décembre 1777, XL, p. 177.)

21) Louis Aurenche, *Un dernier Ami de Jean-Jacques Rousseau, Le chevalier de Flamanville 1751-1779*, Librairie ancienne H. Champion, 1921, p. 11.

『対話』の四草稿の収集について（土橋）

る。特に、ブースビーはルソーが隠遁してからも数回にわたって手紙を書いたらしいが、もはやエルムノンヴィルから返事が来ることはなかった<sup>22)</sup>。彼らもまた、ジラルダン侯爵に対して不信感を募らせたのだった。

ジラルダン侯爵の振る舞いのなかに見え隠れする不審さを払拭できない理由はまだある。それは彼がルソーの死の直後、『告白』の原稿（パリ草稿）をテレーズの許可なしに勝手に自分の物にしたことだ<sup>23)</sup>。ルソーが使っていた引出し付きの机から、「ジラルダン侯爵による『告白』の剝奪は不可解な性急さで行われた」と主張するテレーズと、「テレーズがその机の鍵を私に渡した」と言い張るジラルダン侯爵の主張は平行線をたどる<sup>24)</sup>。しかし、どちらの言い分が正しいにせよ、ムルトゥーやデュ・ペールーにとっては、『告白』の存在を隠されていたことに違いはない。この草稿は最終的にはテレーズの元に戻ったが、1794年9月27日、テレーズは国民公会（1792-1795）にこの『告白』の草稿を譲渡してしまった<sup>25)</sup>。

交わされた書簡を読むことができる後世の読者も、ルソーの死後すぐに書かれた手紙から、ジラルダン侯爵を警戒すべき人物と見なさざるを得ないだろう。ここではジラルダン侯爵が、ムルトゥー、デュ・ペールー、そしてマルク＝ミシェル・レイに送った訃報の知らせを順に比較してみたい。

ルソー氏はわれわれの腕の中で息を引き取ったところです。私は彼からあなたの友情と言葉を求めるよう、そして彼があなたに託した委託物 (Le Depot) を彼の不幸な妻にしか決して返さぬよう仰せつかりました<sup>26)</sup>。

---

22) Jacques Zonnefeld, *Sir Brooke Boothby, Rousseau's Roving Baronet Friend*, La Haye, Uitgeverij « De Nieuwe Haagsche », 2003, p. 93.

23) CC. 7681 (Thérèse à DuPeyrou, le 6 mars 1780, t. XLIV, en particulier p. 175-176.)

24) CC. 7710 (Girardin à DuPeyrou, Ermenonville 17 may 1780, N°. 33, t. XLIV, p. 235-238.)

25) これ以降、この草稿は国民議会図書館で所蔵されている。

26) CC. 7176 (Girardin à Moulto, 3 [lire le 2], juillet 1778, t. XL, p. 231. 強調は引用者。)

ルソー氏はわれわれの腕の中で息を引き取ったところです。私は彼からあなたの友情と言葉を求めるよう、そしてあなたの手から彼の思想の一つも漏れ出すがままに決してしないこと、彼の不幸な妻にしかその聖なる委託物 (ce dépôt sacré)を返さぬよう仰せつかりました<sup>27)</sup>。

ああ、レイさん、なんという宿命の一撃！彼は田舎での滞在と友情のなかでいくらかの休息の希望に身を委ね始めたところでした。[…] この卓越した頭脳は、突然の、そして死の発作に襲われたことです。この発作は彼を私たちの腕の中でこと切れさせました<sup>28)</sup>。

ムルトゥーとデュ・ペール宛ての手紙のなかで、ジラルダン侯爵はルソーが彼ら二人に託したであろう「委託物 (le dépôt)」についてほめかし、テレーズを口実に返還を求めている。なぜなら彼は二人がルソーから何かを託されたことを知っているに違いないからだ。ただ、あまりに曖昧な言い回しのせいで、具体的にはこの「委託物」が一体何を指しているのかをはっきりと読み取ることができない。しかし「委託物」の存在とその正体を知り、秘密にしたいと思っている人間にとっては、このほめかしこそ脅威となったに違いない。実際、ルソーの草稿に対しての権利を持っていないと自覚しているデュ・ペールはこの手紙にすぐさまお悔やみの返事をしているが、『対話』の存在を明かしたくないムルトゥーは複数回返事を催促されるまでこの手紙に返事をする事はなかった。二人への手紙の内容とは対照的に、草稿を持っていなかったレイへの手紙の内容は感傷的なものに過ぎない。

---

27) CC. 7177 (Girardin à DuPeyrou, Ermnonville par Senlis 2 juillet 1778, t. XL, p. 232. 強調は引用者。)

28) CC. 7178 (Girardin à Rey, à Ermnonville par Senlis 2 juillet 1778, t. XL, p. 233.)

交渉の席に着いたムルトゥーは困惑したに違いない。なぜなら『ルソー全集』に『対話』を含めるか否かについて、ジラルダン侯爵の思想と行動は一貫していなかったからである。つまりジラルダン侯爵は、ある時期は『対話』を公表すべきであると言ったり、またあるときは、やはり『対話』を発表すべきではないと主張したのだ。そもそもジラルダン侯爵は『対話』を託されなかったのだから、ルソー本人から『対話』を託された人々の意見に耳を傾けるべきであったのではないか。以上の理由から、『対話』をめぐる彼の方針と振る舞いは信用できないと結論付けられる。だが一方で、ジラルダン侯爵の調査能力なしに『対話』のその他の三草稿の所有者を明らかにすることはできなかったことは確かである。以下では、その他3名の所有者とジラルダンとの交渉と彼らの考えについての詳細を見ていきたい。

## 2. ブースビー、ダンジヴィレ伯爵、コンディヤックとの交渉

『対話』という作品の存在を知り、『ルソー全集』を編集するためにも、この作品の草稿を集めなければならないと考えたのは、他でもないジラルダン侯爵であった。ただし、ここではいくつかの疑問が浮上する。ルソーから草稿を託されたわけでもなく、作品の内容も知らなかったにもかかわらず、なぜジラルダン侯爵は『対話』という作品の存在を知ったのであろうか。おそらく、彼はルソーの存命中に作家自身からこの作品について聞いたか、あるいはテレーズから聞き出したのだろう。あるいは、『夢想』の「第一の散歩」の読解を通してそのタイトルを見抜いたのかもしれない<sup>29)</sup>。また、なぜ彼は『対話』の草稿の所有者たちの名を知っていたのだろうか。ジラルダン侯爵が持っていた、ルソーの残した『対話』の下書き（ヌーシャテル草稿）にも、清書された「さきの著作のてんまつ」と同

---

29) *Réveries*, « première promenade », in *OC*, I, p. 998.

じように所有者の身元は明記されていなかったはずである<sup>30)</sup>。いずれにせよ、この作品の存在を知ったジラルダン侯爵は、草稿の所有者たち—ブルック・ブースビー、ダンジヴィレ伯爵、エティエンヌ・ボノ・ド・コンディヤックの3名—を見つけ出し、ルソーの妻であるテレーズにそれを返還するよう求めた。

『対話』にはジュネーヴ草稿のほかに、3つの清書原稿があることはすでに述べた。それらをルソーから託された人たちは、ジラルダン侯爵の要求に対してどのような返事をしたのだろうか。ルソーは彼らにも出版の希望時期を伝えていたのだろうか。ここではジラルダン侯爵による交渉の手紙の読解を中心に、それぞれの受託者たちの反応を明らかにしていきたい。

## 2-1. ブルック・ブースビー（Brooke Boothby）とロンドン草稿

イギリス人青年のブルック・ブースビーとルソーの出会いは1766年4月、ルソーのイギリス亡命中のことであった<sup>31)</sup>。ルソーはフランス語を巧みに操るこの若者と植物採集を共にすることでつらい日々をやり過ごしていたようだ。彼らはそれぞれが別の場所で暮らすようになってからも手紙のやり取りを続けており、1776年4月6日に『対話』はプラトリエール通りのルソーの自宅でブースビーに託された。この原稿はロンドン草稿と呼ばれ、「第一対話」までで中断されている部分的な草稿である<sup>32)</sup>。

『対話』回収のための交渉をブースビーとするために、ジラルダン侯爵

---

30) すでに述べたように、このノートには「さきの著作のてんまつ」の下書きが書かれている。つまり、「若いイギリス人」と「古くからの知り合いの、田舎に住むアカデミー会員」ということだけは読み取ることができる。

31) ブルック・ブースビーについては、とりわけ以下の二つの論考が参考になった。Jacques Voisine, « Un ami anglais de Jean-Jacques Rousseau: Brooke Boothby (1743–1824) », in *Revue de littérature comparée*, no. 274, 1995, p. 215–224. (論文名中においてはブースビーの生誕年が1743年となっているが、正しくは1744年。); Jacques Zonnefeld, *Sir Brooke Boothby, Rousseau's Roving Baronet Friend*, La Haye, Uitgeverij « De Nieuwe Haagsche », 2003.

32) 草稿を託された日付はロンドン草稿に加筆されている。そのほか、ブースビー及びロンドン草稿についての詳細は以下の拙論を参照のこと。土橋友梨子、「ジャン＝ジャック・ルソー『対話』のロンドン草稿—ブルック・ブースビーによる編集について—」、『日本18世紀学会年報』、日本18世紀学会、29号、2014年、p. 25–38。

『対話』の四草稿の収集について（土橋）

はまず、ジョージ・シモン・ハーカール伯爵（George Simon Harcourt, 1736-1809）に仲介を頼む手紙を送った。1778年7月30日付けの手紙で、ジラルダン侯爵はハーカール伯爵に次のように述べている。

ルソーはブースビーに、タイトルも内容も私たちには分からないとしても重要な草稿を託しました。しかし、それはきっとルソーの回想録でしょう。[...] ルソーの最後の意志に対して責任を負っている私としては、あなたが彼に手紙を書きたがっており、ルソーが彼に託した草稿を未亡人にすぐに返還することを彼に頼みたがっていると期待しています<sup>33</sup>。

一見すると、ジラルダン侯爵はルソーの意志を尊重し、テレーズのために草稿の返還を求めているかのように見える。しかし、そうであるならば、自分も『告白』をテレーズに返すべきであるが、彼は決してそうしない。さらに言えば、「タイトルも内容も私たちには分からない」と手紙には書いているが、ジラルダン侯爵はこの草稿のタイトルも、本当はすでにわかっていたのに知らないふりをしている。彼は多くのことを知りながらも、交渉を進めるにあたっては、相手に対して情報を隠すか、小出しにしかない。そのことは次のブースビー宛の手紙からも読み取ることができる。

彼があなたを信じ、あなたに託した原稿は彼もコピーを持っていなかった。でも私は他に2つのコピーがあると思っています。私は確信がないのですが、この作品の名前は『対話』といいます。私はあなたがこの作品の完全版を持っているのか、あるいは第一部しか持っていないのか、その他の2人の人がどうなのか知りません<sup>34</sup>。

---

33) CC. 7225 (Girardin, à George Simon Harcourt, comte Harcourt, Ermenonville Par Senlis, 30 juillet 1778, t. XLI, p. 102. Souigné par moi-même.)

34) CC. 7239 (Girardin à Boothby, début août 1778, t. XLI, p. 127.)

ジラルダン侯爵は、『対話』を所有するブースビーと直接交渉するようになるやいなや、突如その題名を明示した。一方で、ブースビーが持つ草稿の形式については、「さきの著作のてんまつ」の下書きを読んで知っているのに、知らないふりをしている<sup>35)</sup>。しかし、ジラルダン侯爵からの返還要請があろうとなかろうと、ブースビーはルソーの死後すぐに、テレーズを慰め、彼女の利益になることなら何でもしたいと申し出ている<sup>36)</sup>。

ジラルダンはブースビーに『対話』の草稿の返還を求めたが、最終的にブースビーが『対話』の草稿をジラルダンに渡すことはなかった。それどころか、ブースビーはルソーから、出版については何の期日も設けられなかったと主張し<sup>37)</sup>、自分自身で「第一対話」のみのこの草稿をイギリスで出版するに至るのである。彼が打ち出した編集の方針は、『ルソー全集』の3人たちのそれとは大きく異なり、敢えて文章や注の削除をせず、ルソーが書いたありのままのテキストを公表するというものであった。この時の「第一対話」のみの『対話』の出版こそ、『対話』を世に送り出すことを頑なに拒否していた『ルソー全集』の編者たちに、完全な『対話』を公表させることを決心させたのである。

## 2-2. ダンジヴィレ伯爵 (le comte d'Angiviller) とパリ草稿

たとえ『対話』の下書きを持っていたとしても、「さきの著作のてんまつ」ではパリ草稿についても、ダンジヴィレ伯爵についても一言も言及さ

---

35) とりわけ、ヌーシャテル草稿では「終えられていた第一対話」« le premier dialogue qui étoit achevé » (MsR 79, f. 7v, noir) と、明確に示されている。

36) CC. 7212 (Boothby à George Simon Harcourt, comte Harcourt, Matlock Bath, July 23 1778, t. XLI, p. 67-68.)

37) 「[...] 私はさきほどイギリス人の若者 [ブースビー] から手紙を受け取りました。それが私に伝えるところでは、彼はまったくいかなる期日の指定もされず委託物 [ロンドン草稿] を受け取ったので、彼の現在の計画は、自分が持っている巻をロンドンで出版することであり、そして作家の名誉、名声、意志のためにそれを成し遂げなければならないと考えているとのことです」 CC. 7471 (Girardin à Du Peyrou, 13 février 1779, XLIII, p. 126、下線強調は引用者)

『対話』の四草稿の収集について（土橋）

れていないのに、ジラルダン侯爵が彼を『対話』の草稿の持ち主として見抜いたことは驚くべきことである。あるいは、ダンジヴィレ伯爵の方から『対話』に関する申し出があったのだろうか。いずれにせよ、ジラルダン侯爵は、ルソーの死後にダンジヴィレ伯爵にも手紙を送ったようだ。

彼女 [=テレーズ] のご主人 [=ルソー] の新しい版は、彼女やその主人の思い出にとって最もふさわしい収入源となるでしょう。

私はいたるところを探しました。ですが、あなたがお持ちだという物についても、あなたが私にお求めになった物についてのどんな「ノート」もここにはありません。私は、彼がパリを出る前にしたことを知りません<sup>38)</sup>。

ダンジヴィレ伯爵（Charles Claude Flahaut de La Billarderie, comte d'Angiviller, 1730-1809）は『対話』のパリ草稿を持っていた人物である<sup>39)</sup>。彼はジラルダン侯爵とルソーの草稿のことでやり取りする際、アレクサンドル・ドレイル（Alexandre Deleyre, 1726-1796）という自分の友人に仲介を頼み、今後はドレイルがジラルダン侯爵と手紙のやり取りをするようになった。

ダンジヴィレ氏は私に次のようにしか言いませんでした。彼はルソー夫人にすべき提案がある。そして彼はあなたを介して、私が彼女とやり取りをすることを望みました。しかし、彼は私に次のように書いています。彼が私に頼んだことのために、あなたに直接問い合わせてと<sup>40)</sup>。

---

38) CC. 7237 (Girardin, au comte d'Angiviller (?), début août 1778, t. XLI, p. 123.) とはいえ、この手紙にははっきりと宛名が書かれていないようだ。

39) パリ草稿の所有者について拙論を参照のこと。土橋友梨子、「『ルソー、ジャン＝ジャックを裁く』のパリ草稿—所有者をめぐる調査—」、『学習院大学文学部研究年報』、学習院大学、64号、2017年、p. 83-104。



この手紙からは、『対話』の出版についてダンジヴィレ伯爵がどのように考えていたのか不明である。しかしこれ以降の手紙を読む限り、ダンジヴィレ伯爵はいくら請われようともジラルダン侯爵に『対話』を渡すことを躊躇っていたようであるし、そのことにジラルダンが焦りを感じていたことは確かである<sup>41)</sup>。

バリ草稿をめぐるやりとりは、ドレイルが仲介をすることで錯綜する。例えば、ジラルダンがムルトゥーに送った10月の手紙では、ダンジヴィレ伯爵はテレーズに草稿を返すのがよいと考えている半面、「この作品は印刷されるにはふさわしくない」と考えていると述べている<sup>42)</sup>。しかし、それから1ヶ月経っても草稿はテレーズのもとに戻っていないことが、ドレイルからジラルダンへの手紙から分かる。

あなたは、ルソーがダンジヴィレ氏に託した『ルソーとジャン・ジャックの対談』（« Entretiens de Jean-Jacques avec Rousseau »）を受け取りましたか？彼はその作品を亡くなった人の妻に返すつもりだと私に言っておりました<sup>43)</sup>。

最終的には、ダンジヴィレ伯爵は<sup>オリジナル</sup>原本をテレーズには返さずに、自分自身で保管するという決断を下したようである。

私はヴェルサイユでダンジヴィレ氏に会い […]、ルソーの草稿に

---

40) CC. 7242 (Alexandre Deleyre à Girardin, A Dame-Marie-les-Lys, près Melun, Ce 5<sup>e</sup> aoust 1778, t. XLI, p. 130-131.)

41) « Ne doutez pas, monsieur, que M. le comte d'Angiviller ne concoure ardemment avec vous, dans tout ce qui pourra être utile à la veuve de M. Rousseau. Il honore sa mémoire, il défend sa vertu, ses ouvrages à la main. » (CC. 7246: Jean-François Ducis à Girardin, A Versailles, 7 aoust 1778, t. XLI, p. 141.)

42) CC. 7313 (Girardin à Du Peyrou, Ermenonville, Par Senlis 4 8<sup>h<sup>re</sup></sup> 1778, t. XLII, p. 19.)

43) CC. 7351 (Alexandre Deleyre à Girardin, au Coudray sur Seine, ce 12 9<sup>h<sup>re</sup></sup> 1778, t. XLII, p. 110.  
下線強調は引用者)

『対話』の四草稿の収集について（土橋）

ついて話しました。彼はおそらく、作家の未亡人のためにあなたが印刷させる全ての作品に対してあなたがそうするように、その原稿の複製を作らせ、あなたにそれを託し、自分自身で原本を保管するつもりの方です<sup>44)</sup>。

これ以降、パリ草稿に関する手紙は見つかっていない。パリ草稿に関わる書簡の読解を通して分かることは、ダンジヴィレ伯爵がこの草稿をテレーズに返還するか否かについて考えあぐねている様子である。要するに、パリ草稿の出版に関してルソーはダンジヴィレ伯爵になんの希望も伝えていなかったのだらうということが推察できるのだ。パリ草稿はその後、テレーズのもとには戻らず、謎めいた人物たちの手に渡り（クラマイエル家の一人の夫人、王領管理官クレリニー氏、ド・ラ・シャペル氏、そしてフロベール氏<sup>45)</sup>）、決して印刷されることはなかった。そして1819年から今日に至るまで、国民議会図書室で所蔵されている<sup>46)</sup>。

### 2-3. エティエンヌ・ボノ・ド・コンディヤック (Etienne Bonnot de Condillac) と BnF 草稿

『対話』の草稿を託された者のうち、たとえテレーズの生活のためであったとしても、ジラルダン侯爵からの草稿返還依頼をはっきりと断った唯一の人物がいる。それが、BnF 草稿を託された「(ルソーの) 古くからの知り合いの文学者」<sup>47)</sup>であったエティエンヌ・ボノ・ド・コンディヤックである。ジラルダン侯爵はルソーの死後、コンディヤックにも手紙を書い

---

44) CC. 7405 (Deleyre à Girardin, A Dame-Marie\_les-Lys, ce 18 X<sup>bis</sup> 1778, t. XLII, p. 245.)

45) これらの名前は、パリ草稿の表紙の裏に紙が貼り付けられており、そこに書かれている。 Voir, OC, I, p. 1903 et Gallica.

46) Cote du document : 1493. 1819年から、ピエール＝ポール・ドリュオン (Pierre-Paul Druon) によって管理されていたフランス下院図書室 (la Bibliothèque de la Chambre des députés、現国民議会図書室) に所蔵される。« Les manuscrits de Rousseau à l'Assemblée nationale », dans *Rousseau et la Révolution*, Paris, Gallimard, 2012, p. 185-209.

47) *Dialogues*, « l'Histoire du précédent écrit », in OC, I, p. 981.

ている。

私はあなたがお持ちの草稿のタイトルもジャンルも知りません。  
[…] しかし、ルソーの真の友人たちは、テレーズのためになると  
言って、新版のなかに現状入れるのがふさわしい作品を集めようと  
しているので、わたしはそれらの運命について静かに見守ろうとし  
ています。それらは、あなたの手と同じくらい忠実な手の中にある  
とき、ルソーの最後の意志に足るものです<sup>48)</sup>。

『対話』の下書きを持っており、そのタイトルを知っているにもかかわらず、ジラルダン侯爵はまたしても嘘をついている。そして、他のすべての所有者に対しての言葉と同じように、新しい版の出版とそれに伴う草稿収集は「テレーズの財源確保ため」であることを主張している。ところが、コンディヤックはルソーとの約束を守るために、たとえ未亡人のためだとしても草稿を勝手に返却することは決してなかった。それは一体なぜだろうか。

この封筒の中にある原稿は決して私のものではない。これは委託されたものである。これを私に託してきた人は、この小包が今世紀が終わるまで開封されないことを求めている。そして私は彼の意志が効果を発揮するために自分の出来る限りのことをすると約束した。それゆえに 1800 年になる前にこの包みを開けることを禁ずる。そして私は自らが相続人として指名する人をその保管者とする。

フリュ城館にて、1776 年 6 月 1 日、コンディヤック<sup>49)</sup>

---

48) CC. 7238 (Girardin, à Condillac (?), [début août 1778], t. XLI, p 125.) ただし、宛て名がないのでコンディヤック宛ての書簡かは定かではない。

49) Voir, BnF, Banque d'images du département de la reproduction, picture collection.

これは、BnF 草稿が封印されていた封筒の表書きに書かれていた文章である。この覚書の内容は「さきの著作のてんまつ」の内容とも完全に一致するため、『対話』は次の世紀になるまでは出版したくないというルソーの意志が客観的にも証明されたと言えるだろう。

コンディヤックはその後、世紀末を待たずに 1780 年にこの世を去るが、覚書にある言葉の通り、草稿はテレーズのもとに返されることも、誰の目にも触れることなく世紀末を迎えることとなる。そしてついに 1800 年 12 月 31 日。ルソーとコンディヤックの願いどおりに、相続人である姪のサント・フォア夫人が公証人らと共にこの封を開けることになる<sup>50)</sup>。その後、紆余曲折を経て BnF 草稿は 1996 年からフランス国立図書館で所蔵されることとなり (Cote. NAF25700)、現在では、フランス国立図書館が運営する電子図書館 Gallica でも閲覧可能となっている。

コンディヤックからジラルダン侯爵への直接の返信は紛失しているが、コンディヤックの返事をジラルダン侯爵がかわりにデュ・ペールーに伝える手紙が残っている。

[...] アカデミーフランセーズ会員のコンディヤック氏は [...] 私に次のように答えました。この著作は次の世紀になってから印刷されるためにしか、ルソー氏から託されていない。私には、彼がそれを返してくれるようには思えない<sup>51)</sup>。

たとえ印刷されなかったとしても、コンディヤックはルソーが自分に託した願いを誠実に伝え、そしてルソーの希望を叶えることに尽力したことが、「さきの著作のてんまつ」、「封筒の覚書」、そしてこの書簡から明らかにな

---

50) この開封の状況については以下の論考を参照のこと。Jacques Soyer, « Notes pour servir à l'histoire littéraire. Qu'est devenu le manuscrit des *Dialogues* de Jean-Jacques Rousseau confié par l'auteur à Condillac ? », *Bulletin de la Société archéologique et historique de l'Orléans*, t. XVI (1913).

51) CC. 7313 (Girardin à Du Peyrou, Ermenonville, Par Senlis 4<sup>8<sup>bis</sup></sup> 1778, t. XLII, p. 19.)

った。

## 終わりに

コンディヤックから草稿の返還を断られたことを伝えるジラルダンからデュ・ペール宛ての書簡（CC. 7313）の日付を見て分かる通り、『対話』の草稿収集はルソーの死の直後から開始されたにもかかわらず、3ヶ月経っても進展がほぼなかったと言える。それどころか、すべての所有者たちから返還を断られてしまったのである。

これ以降、『対話』出版までにはあと2年の月日を要する。その2年の間に、3人は互いが持っている草稿を照らし合わせるために集会をする約束をしたり、『告白』や『対話』の所有や扱いをめぐる、嘘を交え、互いに欺きながら議論を交わしていくことになる。本稿では、その複雑な議論の解読に入るまでの各人の主張を提示することに専心した。この結果をもとに、今後は『対話』の出版をめぐる議論に着目しながら、出版に至るまでの複雑な経緯を読み解き、その全体像を解明していきたい。

